



續無名抄中目錄



三部神道の事

二系法泉寺傳受流

宗紙名月名句の事

昌珠宗程の事

曼の事

深見坊の事

菩薩を思

伊の事

中位後の事

東坡の事

心敬僧都名月名句付言的句の事

八月十五夜の事

万葉集の事

七夕の事

七字の事

志の事

中目録



特定課題

雲英末雄

58- 3935

江戸傳通院開基

増上寺の事

くろみ山

白河の関甘菜を考ふる

東明天皇の事

いろは山

為丸光彦の事

傳中吉備の宗室の事

たけのくぬきの事

人の名丸の字の事

二系后僧と普通の事

西遊疑の事

念仏の事

いろはの論

正月雨をばらまきの事

續金部抄卷中

一 古道を神道の根をあらはし神道法を傳へる

事也神道は三部あり宗源神道の中良ト

部忌部也傳也也部習合の神道ハ弘法傳教

木の智藏法師にして神をよみ合し服金西部

と陰陽を配し神の土地一節とす一と陰陽

別乃大守神神婚祠乃傳をいふらる

其わらへ田地とて家名とて名向とてぬ社は

いろはとてくよ坊字と名はくそのうら神院

兼師法解（一）も（二）のり狐狸（三）の（四）法解
（五）も（六）のり延嘉式神名帳（七）の（八）由来由
 可（九）夫神社の（十）の（十一）神職（十二）の（十三）其（十四）其（十五）を（十六）小
 さけ（十七）の（十八）本迹縁起（十九）の（二十）神（二十一）を（二十二）其（二十三）其（二十四）の（二十五）神某
 の（二十六）社（二十七）を（二十八）来（二十九）よ（三十）は（三十一）に（三十二）来（三十三）よ（三十四）る（三十五）縁起（三十六）一（三十七）より（三十八）て
 多（三十九）礼（四十）を（四十一）撰（四十二）り（四十三）是（四十四）を（四十五）て（四十六）三（四十七）部（四十八）の（四十九）神（五十）を（五十一）也（五十二）び（五十三）弁
 理（五十四）當（五十五）心（五十六）地（五十七）の（五十八）神道（五十九）一（六十）つ（六十一）ら（六十二）ふ（六十三）人（六十四）十（六十五）く（六十六）外
 一（六十七）中（六十八）に（六十九）後（七十）一（七十一）高（七十二）天（七十三）原（七十四）仁（七十五）神（七十六）留（七十七）座（七十八）須（七十九）と（八十）ふ（八十一）ぬ
 け（八十二）一（八十三）語（八十四）の（八十五）後（八十六）乃（八十七）至（八十八）極（八十九）也（九十）言（九十一）夫（九十二）の（九十三）存（九十四）を（九十五）存（九十六）心（九十七）也

心を混沌の字神明の舎也心清淨なり
 神明本格す此心の外ふる天の原もろく穢の外
 一神もわすれは儒門神（一）に（二）法（三）由（四）つ（五）ら（六）ふ（七）心（八）法
 危（九）氏（十）の（十一）詞（十二）一（十三）有（十四）誠（十五）則（十六）有（十七）神（十八）無（十九）誠（二十）則（二十一）無（二十二）神
 一（二十三）方（二十四）の（二十五）傳（二十六）来（二十七）を（二十八）記（二十九）貫（三十）く（三十一）其（三十二）後（三十三）後（三十四）成（三十五）と（三十六）む
 今集れ相傳ありや二系家を為世郷より
 經賢（一）孝（二）尊（三）孝（四）惠（五）孝（六）孝
 東野列考縁（一）宗（二）祇（三）道（四）達（五）院（六）實（七）隆（八）稱（九）名（十）院
 公（十一）際（十二）三（十三）光（十四）院（十五）實（十六）隆（十七）細（十八）川（十九）古（二十）昔（二十一）法（二十二）中（二十三）と（二十四）傳（二十五）来（二十六）て

八条及中院后 爲丸后なり也皆言昔より侍へ
終 宗祇より牡丹花肯拍へ侍へら行流を
甥傳受といひ世に誠南都饒頭屋侍とい
をを臣傳受といふ也

一二条家冷泉家といふもや定家郷乃任西三条道
也冷泉通といふも世に高家也世に誠といふも
高れといふも二条に高家といふも二条
家といふも三條に冷泉といふも高相郷といふも
一より冷泉家といふも冷泉家を上冷泉下

冷泉後名也

一眉山早行詩

馬上續殘夢不知朝日昇ノノガル

又唐王加馬句

馬上續殘夢馬嘶時後名

上の五字同一東坡より誠なり行といふも
名譽なり也新よも中字控た也

すあより此水のともかむらむけといふ風流あり

堀河院百そ形伸也

いふの海流なりといふも神のわきて高家もあり
上より相違るもこの上流すきき趣まらぬあり

番方合の詞一白そのら時一秀遠下あり
をらめかこく事たふとや王駕東坡下の句は若
悪はれあひむの言れ下の句まこははるむ
連文のる前句一からたはたか一有はる
決けらる勿通難するあり

一宗祇の句とやむ名月のくわい高か

一と海乃月波くわいすあり

とあしあふ家も一名月ははれかか

一と海の力なくあり

朝をけりけしむとむのらりか一別の
等類一とむとまは梅海神のあり
言安し一と事なり百と

世乃一書わけえ元目ふ

立安し一と形あり百と

と俗せぬは守持まこ作也

一はのやう一ふけりえん言よみて花鳥并ニサ推章郷
れはあし一とけは添テサあはれは五月雨の題え
ぬちをぬかすもあぬ本とてうと一とあふ月

雨のし海へあつたよふの葉はうらふちあつて
とあつてあつた葉はうらふちあつて
多くうら又秋夕の題よて

神はよのほれはなほいほくはまのあつた
なほあつたのゆふれは五中法言の時れと改めく
内藤家のあつた葉は余 為た資慶郷より西の
あつたあつたし内藤ふ 哥とおおとよふのあつた
とつたあつたよふ乃かほ引くはあつたあつた
道理きさらあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたはあつたあつたあつたあつた
しあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

一寛文丙午のうら資慶郷より三首の縁とあ
けてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
え一首の縁とあつたあつたあつたあつたあ
き草といふ題よて

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

のうらみん まい水月映涼と題はくまは
いさ百新りうとえ池水の緑すしと月のまろか
りまの河連音の様やゆかりの葉かたみふこそ
とあふしこのまよひぬむつひを流のうらみ
歳言り

いさ百新りうとえ池水の緑すしと月のまろか
りまの河連音の様やゆかりの葉かたみふこそ
とあふしこのまよひぬむつひを流のうらみ
歳言り

一葉 移管りて 田シツカも心深 心敬僧都

らふ花の青まて 月よのみや内分

言語道ひの句やこの句はひすはは 慧ハシツカ華の地り
わすもまひとまくと 歌カラカレ也又言的の付句に

とよ蝶のゆきさけりなかなみくさ

とよ蝶のゆきさけりなかなみくさ

あはまこと者群乃志はるは鮎 胡蝶乃はは
ひらとみゆはつと鳥も月あまの葉言誠よ
あま也

一本 新法 翻案 一葉 数句よ 西のま

中のわさうきりきりきり松

法華の初らきりきりきり松
心のあるしきは花歳身よりきりきりの句あり
一ゆめの武士松澤洗菴とよ人の句あり

いよいよ六月のつられ一葉りか

思程祖白言祥いつれも長志は磨美の句や
心のあるしきは花歳身よりきりきりの句あり
句あり

中松はへそらうきりきり松

を燈の系氣さくくくく一軒そら松
感情やみくも句也又余り句也

とらとぬ風もみくも朝水

祖白乃長志磨美の句也連音をさるる句也
みくもそらの句也ほくもみくも句也
先日よ

まよふりせはらふゆきよりの句也

宗因宗言あゆみうかひきりきり松
昌程者よけりけりきりきり松

一昌琢の伝言一

なむくは乃ゆ海らなむ

此道高き人くわんしりふらよ昌琢乃
兼もよわし海乃をせよふら句と抄りぬん
句は終よハ終とふらよふら度ふらうし
ぬふこの時も崩れなして執筆せむらて

竹の子よふらうのあうたてとあらはむ
とと昌琢乃ちあや

一昌琢の伝言一

昌琢の山一つたれすむ

和乃をのさけとあぬわん

一たわと感一既り既筆信紙一
父昌琢ゆらけとわんととやあんとみよ
のふ人くつあんとととあらの考選
作らしたと昌琢のあゆむ昌琢
あはあんとらして又和のたつと五り既筆
わら昌琢をたえしととたとの終
おのけあのちたとあぬは

まゝに思ふに仕方の句をなすの心なりと五
中よりそはてしなくのうまふ不思議の事や

一梅の吟の俳諧の所へ何ひのうまふ思ふ事
のうまふ所を連言の所へさかたけしむる思
乃新式の律釋をせばしるふゆゑ思ふ事
他、准之とありあまゝ言ふたもやこの准すよ
字よ其准しものうまふとありとて學者
石字者乃ありありと律をなすゆゑ俳諧者
所ありたりとて思ふ事ありとて思ふ事あり

一八月十五夜の月、此書下の事ありとて思ふ事
李唐より起りしや也、書宿りありありと
必清明よりとて思ふ事ありとて思ふ事あり
郡康節中秋の吟よ

一年一度中秋夜、十度中種九度陰
とて思ふ事ありとて思ふ事ありとて思ふ事あり

日本一七管道真詩
昔被榮華簪組縛、今為賤謫草萊囚
月光似鏡無明罪、風氣如刀不破愁

此續法苑珠林卷之四其末の抄りよりわづらひく書す
事なるぬ又無題詩集法性寺關白の侍
十三夜影勝於古數百年光不若今
独憇前軒回首見清明此夕價千金
あねの事法苑珠林卷之四の良夜と云す

一尚書大傳 桀自言吾有天下如天之有日
日區吾以耳

あつて後を一万葉十二卷の事

久望天はまゝたててはれりやあはれ社吾忘やあ

一忘しまんをせめりみじとゆつて後陸盤と
極りて衣をきて夢の妙童并と念す
必極めりみ衣とやあうり

あせめり衣はまゝとせめりゆのようれ

衣はまゝしてせめり

一万葉十六無心所著の事とて
吾妹兒之額爾生流雙六乃事負
乃牛之倉乃上之瘡

ゆゑにけあのけいふるまゝ清やび世間

よきぬ人の俳諧れつゝとて五句のさうもけしき
けのさいのせとむすむあぬ姿のさやうも無心所
著の勢也百類のうち五句三句をさうとけん毎句
けつとやうけいあむすあさきまらやけのせと
の句作を極難もきけとけしめておまへ

い由舞妓のゆきと宗鑑のぬきと
と傳せぬ 古事記中つゝ時政九代の後胤
前相模守平の多時入道宗鑑の代へ至つて
天地命をあらとむと危杖家よりけしむとさ

け宗鑑ぬきのぬきをさうとてあらみ合
勢奥北条九代滅亡とて危杖い由の俳風も
江戸京大坂南の流と多て専ら無心所著の
ぬきと山崎宗鑑よりいゆけけしむとけしむ
乱達の控極也其ぬきを京江戸大坂の俳士
の作今日おととて者とてあま風俳林より
いれと子の格とあまかぬけとを極しと
固くといふ意固波流のすゑとあまらひと
あんとといふ意固一格と五句三句あまら

すうしをいけらちよまるとも風の舂とちりあぬ
 天下の俳諧一日も安堵乃作らんやあつらふあ
 守武としてあそびの十句の樂はやつと梅麩
 こゝろ向肝のちさやうてかみあんろゝあわら
 眉としそめ関人唇絃うろ寸是俳諧のま志
 もの成あてん面と乃家法とせんときりかた
 りなぬ俳門は字士あそびのちあまひとし
 一むしの人おあひ入あそびぬる也深覺俳の身
 一しき能く入て我身一のあまひのちあ

一 手向まを流わの袖もさうくさうさみらよはくさ
 神やんはむじけ素性ほゆを右近の侍監あして
 清和の時乃人うれあそ能書也也南とれ結よ
 遍眼もとく結なれははのそをほしそよのち
 法一おな結あよそたぬ

一 寺仙のうさやうしり三極のち
 世言寺は結乃流 言圓親王の海 徳を寺教
 家のらうやう余はさして習ふ人志高へさそや
 そ様まらりしめて世の寶とすくさそ悟也

一 神の周なるまゝにわたりて三千年のわが国に

はまゝにありしをみよむるや月々の葉よはる

あゝまのあはれなるまゝにわたりて

衣なりとも はあはれなるまゝにわたりて

せむしを

一 菩薩れ無生忍法得ふもれすもをんをん

前よてを神通もはるまゝにわたりて

見あはし誠なるありわが人をえんす

その業はまゝにわたりてをんをん

その長そとをまゝに業はなりてをんをん
張ふり入て事法なりとをん

一 西域サキ萬字仏胸前吉祥相也 名義集

七 七字も虫満乃割りりやの字也延喜の帝と

の帝と也七人の賢人はたうて故とあはし

あや久しとをんをんをん七世とをんをん

て七徳とをんをん

一 おのあましとをんをんをんをん

名はなり 此方のとをんをんをんをん

一 江戸の岡田の井 金女二歳のころにあり
りてまた言ひて時儒学の師横川氏を融治
陸の安を府にほりては甚ふき事なり
おほいなる岡田の安を府天徳寺の東申れり
公方家の後僕の後園にありてはぬかみ
乃名水也とありて一益のいふはよき水なり
一 江戸の志とふりて東叡山寛永寺也南光坊
慈眼大師の開基也寛惠江戸の江村に正月
乃すまげと江戸の志とふりては優なりとの

不此結寺は五条の天神とあり侍所とあり五
条の天神とあり少彦名命とあり大己貴命とあり
合世醫業の事ははめりせよをては少彦名神也
史本抄 後漢の事
おほいなる志とふりては優なりとの
一 江戸無量山壽福寺傳通院をりては善上人は
草創なりては順徳年中に開基也とありは寛永
僧都の代を像の河弥陀也との了善上人は

生の夢を蓮華化生乃夢也とのま空也の言

一 唐も南無阿彌陀佛は人の蓮花よあはれは

又り唐上人の言一向無痴の人変定は

智わりのぼるすくすじ無痴乃心字くうと

事やこの無痴をくくくくの智くくく

一 三縁山増上寺を大蓮社唐答聖聰上人の因基也

り唐上人の弟子是淨土經の文は親縁近縁増上

縁といふ事ありはる名付は山号寺号也先

りよあるらるは号嘉徳号古語とくくく

廿一まきくくくの人を将号名を根慈せんゆら

るの熟字は付し

一 黒髪山を下野国二荒山也補陀落守和訓

ゆわくゆきく近し今れ日光山也釋道勝初

開基す新子載集よ公室の言

獨人のふ置れ美や杉わんふみ穴五月ぬら

果よ六傳中も余もくくくくくくくくく

ちくくくくくくくくくく 経家の言

くくくくくくくくくくくくくくくく

一白川乃國を平野と云ふはよの宮と云ふなり
二市乃ハ北の白川二市の國といふ能母と云ふハ
はよの宮といひて海道也其上ノ開山といふハ
乃九折フナクリなる一里許もゆるしと云ふ満願寺と云ふ
密宗の寺は孝桓武の帝は新創といふ勅筆ハ
額何れと云ふ白川關高玉繩下夢觀集ノ陸天
錫シカクヲ作つてもあらうと云ふ同く志名也と云ふ
つてアツと云ふの言ハけ國邊通ふといふ處ハ
わづかに冠山といふはけりといふこと

西のりより東のりともなるはけり
市を流すゆへに事ハなかりしと云ふこと
と云ふは龍心ハなること

一將軍家白河をあらはし時國の明神子奉幣中
何れは同小景季と云ふて高時初秋也能因ヨシ
古風なといふ出さるなり作らる景季馬カ也
そのもの一首と云ふ

金鳳キンの草水の露とほろと云ふこと
練キモの膽タン勇ユウ武ブと云ふは風流のあらうこと

曹操^{サウタク}を撃つと擣て侍代賊すこ同日の湯あきなり
一人王母^{ヤマト}八代齊明^{サイメイ}女主人^{メノミヤコ}登極之日天智天皇為白皇太子
此時新羅百濟のあわひありあきて齊明天智
別難波より言え軍事法けり戦艦と作く
難波と敷し油蔭の吾馬あそひありけり
龍鴛代赤の国朝倉山よりとめ橋廣庭の宮
天武天皇之時に新倉山の事法よりけり宮の
と作る皆よ木の事とせらるるなり木丸なる

又新子園中法名地の地より一園中ゆめれ其
名法とて一法なりと法守は作り天智天皇は詔
一法の内制なり

一法名や木の丸なる我をなす名ありつらなる
是と和字の家法は木の丸なる新倉をけり
也とわりの法し又百人一首の押もよきなり
一し太政原兼良乃法也是日本紀延喜式と律令
赤の園と法とす一し海考あり古作の国鶴
来巢山より新置乃園也林氏向陽軒春齋鴻

儒乞と波とて去依朝倉字再興の記もそら
 一濃別稻葉山をいゆり改阜やまの情有山
 名得情山有松この得情山をいゆり島取より南北
 ありて松もまこかりてけり家祇の記也余
 之室を極親ぞけりけりなりぬ

一先年抄章の心一禁裏和衣此由沙法り題ハ
 松^{ルカ}輝^{ルカ}遊^{ルカ}と四字の題也為丸光廣郷母
 則の牧少^{ホク}おぬりかりてとせ新由也

一傳中者傳津字金の動するも何れ巫覡^{フダキ}金凡

りり出^シてさあひ米と一はまみ入水とと

わたり雷^{ライ}おとく動すといふるいぬさ

常より人家より金れうる何れかありす山事
 なるそ忌もや楚辭ト居篇凡金雷鳴
 朱子の解凡金無^キ色之物雷鳴謂^ク妖怪而作

穀如雷鳴也カあははあるといふものもあはは
へまゝの史い両者徳津の言金に動する事無
盲モラの男女ひんが娘するも満キワラフ一ヒトツ笑のつや
一在原業平を幼女あわし時シダ學陀羅丸と号は
ひまればと天下の美男あわし空海の弟子真雅
僧都戀慕してをまゝと空海よみて贈ツカ信をえ
たといつらとといふおれといはしつねとわれ
意イ一ヒトの心

一人の名は丸と子字ははくるとまを名は石淨地合

恙や石淨を鬼魔のまを娘ふめやたけく鬼
魔の類らけつと高心と移して名のもよほし心也
古今集は作者より屎コフといふ書之を幼名は紙シといふ
ととふ類はけい海も穢エタ多の子りてその名
と穢多といは々又いぬと名付ら事皆移り
是言肯以平の古今よりまゝに紙といふ
一寛平八年九月二条后 清和の后 陽成の母
東光寺の僧善祐と密通の事歌れ名を
清成十后善祐を伊豆の國へあはし居るこの

時五十五歳也... 聖人... 下... 心... 事

二

避嫌疑詩

女子年當省事時 莫容出外去遊嬉

僧房佛室尤當忌 親戚人家亦不宜

遠僧道詩

僧尼道士到人家 女子休教出侍茶

...

女子家密房眠... 引入...

ぬ事也僧尼女子のま...

一念... 一念多念...

起り多念... 隆寛...

一雷... 理人...

...

...

...

...

較^多年とのまゝ是古々の定論也

一五月乃雨^はゆとある本草雨水のちよ^り

五月上旬^{より}下旬^{まで}は^はる^る候^はて^はま^まし^しこの^は皆^皆芽^芽

物^は昼^は像^はさ^ささ^さし^しこの^は雨^はより^はは^は垢^垢を^を梅^梅の^の葉^葉

と^と葉^葉より^{より}わ^わく^くし^し速^速よ^よあ^あめ^めり^りと^と也

時^時珍^珍曰^曰梅^梅雨^雨或^或作^作徽^徽雨^雨芒^芒種^種後^後逢^逢壬^壬為^為入^入梅^梅小

暑^暑後^後逢^逢壬^壬為^為出^出梅^梅芒^芒種^種と^とを^を五^五月^月の^の節^節也^也ま^まさ

小^小暑^暑と^とを^を六^六月^月の^の節^節也^也宛^宛竟^竟五^五月^月中^中の^の雨^雨は^はゆ^ゆと

あり^{あり}と^と也^也

